

葱

芥川龍之介

青空文庫

おれは締切日を明みようとち日に控えた今夜、一気呵かせい成にこの小説を書こうと思う。いや、書こうと思うのではない。書かなければならなくなってしまうたのである。では何を書くかと云うと、——それは次の本文を読んで頂くよりほかに仕方はない。

神田神保町かんだじんぼうちようへん辺のあるカツフエに、お君きみさんと云う女給仕がいる。年は十五とか十六とか云うが、見た所はもつと大人おとならしい。

何しろ色が白くって、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、とにかく一通りの美人である。それが髪をまん中から割って、忘れな草の簪かんざしをさして、白いエプロンをかけて、自働ピアノの前に立っている所は、とんと竹久夢二君たけひさゆめじの画中の人物が抜け出したようだ。——とか何とか云う理由から、このカツフェの定連じょうれんの間には、夙つとに通俗小説と云う渾名あだなが出来ているらしい。もつとも渾名にはまだいろいろある。簪の花が花だから、わすれな草。活動写真に出る亜米利加アメリカの女優に似ているから、ミス・メリイ・ピックフォード。このカツフェに欠くべからざるものだから、角砂糖。ETC. ETC.

この店にはお君さんのほかに、もう一人年上の女給仕がある。

これはお松さんまつと云つて、器量きりようは到底お君さんの敵ではない。

まず白麵パン麴と黒麵麴ほどの相違がある。だから一つカツフェに勤めていても、お君さんとお松さんとは、祝儀の収入が非常に違う。お松さんは勿論、この収入の差に平たいらかなるを得ない。その不平が高こうじた所から、邪推もこの頃廻すようになってゐる。

ある夏の午後、お松さんの持ち場の卓テエブル子にいた外国語学校の生徒らしいのが、巻煙草まきたばこを一本啣くわえながら、燐寸マッチの火をその先へ移そうとした。所が生憎あいにくその隣の卓テエブル子では、煽風機せんぷうきが勢いよく廻っているものだから、燐寸の火はそこまで届かない内に、いつも風に消されてしまう。そこでその卓テエブル子の側を通りかかったお君さんは、しばらくの間風あいだをふせぐために、客と煽風機との

間へ足を止めた^と。その暇に巻煙草へ火を移した学生が、日に焼けた頬^{ほお}へ微笑を浮べながら、「難^{ありがと}有う」と云つた所を見ると、お君さんのこの親切が先方にも通じたのは勿論である。すると帳場の前へ立つていたお松さんが、ちようどそこへ持つて行く筈の、アイスクリームの皿を取り上げると、お君さんの顔をじろりと見て、「あなた持つていらつしやいよ。」と、嬌^{きようしん}嗔^{しん}を発したらしい声を出した。――

こんな葛^{かつとう}藤が一週間に何度もある。従つてお君さんは、滅多にお松さんとは口をきかない。いつも自働ピアノの前に立つては、場所がらだけに多い学生の客に、無言の愛^{あい}嬌^{きよう}を売っている。あるいは業^{ごう}腹^{はら}らしいお松さんに無言ののろけを買わせている。

が、お君さんとお松さんとの仲が悪いのは、何もお松さんが嫉妬つとをするせいばかりではない。お君さんも内心、お松さんの趣味の低いのを軽蔑している。あれは全く尋常小学を出てから、浪ななわ花節はなふしを聴いたり、蜜豆みつまめを食べたり、男を追っかけたりばかりしていた、そのせいに違いない。こうお君さんは確信している。ではそのお君さんの趣味というのが、どんな種類のものかと思つたら、しばらくこの賑にぎやかなカツフェを去つて、近所の露路ろじの奥にある、ある女髪結おんなかみゆいの二階を覗のぞいて見るが好い。何故なぜと云えばお君さんは、その女髪結の二階に間借をして、カツフェへ勤めている間のほかは、始終そこに起臥おきふししているからである。

二階は天井の低い六畳で、西日にしびのさす窓から外を見ても、瓦屋

根のほかは何も見えない。その窓際の壁へよせて、更紗さらさの布ぬのをか
けた机がある。もつともこれは便宜上、仮に机と呼んで置くが、
実は古色を帯びた茶ぶ台に過ぎない。その茶ぶ——机の上には、
これも余り新しくない西洋綴とじの書物が並んでいる。「不如帰ほととぎす」
「藤村詩集」とうそん「松井須磨子の一生」まついすまこ「新朝顔日記」
「カルメン」
「高い山から谷底見れば」——あとは婦人雑誌が七八冊あるばか
りで、残念ながらおれの小説集などは、唯一の一冊も見当らない。
それからその机の側にある、とうにニスの剥げた茶筆ちやだんす笥すの上に
は、頸くびの細い硝子ガラスの花立てがあつて、花びらの一つとれた造花の
百合ゆりが、手際よくその中にさしてある。察する所この百合は、花
びらさえまだ無事でいたら、今でもあのカツフエテエブルの卓子こしに飾ら

れていたのに相違あるまい。最後にその茶筆筒の上の壁には、いずれも雑誌の口絵らしいのが、ピンで三四枚とめてある。一番まん中なのは、かぶらぎきよかた 鏗木清方君のげんろくおんな 元禄女で、その下に小さくなっているのは、ラファエルのマドンナか何からしい。と思うとその元禄女の上には、北村きたむらしかい 四海君の彫刻の女が御隣に控えたベエトオフェンへしたた 滴るとき秋波しゅうはを送っている。但しこのベエトオフェンは、ただお君さんがベエトオフェンだと思っているだけで、実はアメリカ 亜米利加の大統領ウッドロオ・ウイルソンなのだから、北村四海君に対しても、何とも御氣の毒の至に堪えない。――

こう云えばお君さんの趣味生活が、いかに芸術的色彩に富んでいるか、問わずしてすでに明かであろうと思う。また実際お君さ

んは、毎晩遅くカツフェから歸つて来ると、必ずこのベエトオフ
エン alias ウイルソンの肖像の下に、「不如歸^{ほととぎす}」を読んだり、

造花の百合^{ゆり}を眺めたりしながら、新派悲劇の活動写真の月夜の間
面よりもサンティマンタルな、芸術的感激に耽^{ふけ}るのである。

桜^{さくら}頃^{ごろ}

のある夜、お君さんはひとり机に向つて、ほとんど一

番^{ちばん}鶏^{どり}

が啼く頃まで、桃色をしたレタア・ペエパアにせつせとペ

ンを走らせ続けた。が、その書き上げた手紙の一枚が、机の下に
落ちていた事は、朝になつてカツフェへ出て行つた後^{のち}も、ついに

お君さんには気がつかなくなつたらしい。すると窓から流れこんだ

春風^{はるかぜ}が、

その一枚のレタア・ペエパアを翻^{ひるがえ}して、鬱^{うこん}金^{こん}木^も綿^{めん}の蔽^{おお}

いをかけた鏡が二つ並んでいる梯子^{はしご}段^{だん}の下まで吹き落してしま

つた。下にいる女髪結は、頻々ひんぴんとしてお君さんの手に落ちる艶え書んしょのある事を心得ている。だからこの桃色をした紙も、恐らく

はその一枚だろうと思つて、好奇心からわざわざ眼を通して見た。

すると意外にもこれは、お君さんの手蹟しゆせきらしい。ではお君さん

が誰かの艶書に返事を認めたのかと思うと、「武男たけおさんに御別れ

なすつた時の事を考えると、私は涙で胸が張り裂けるようでござ

います」と書いてある。果然お君さんはほとんど徹夜をして、浪な

子夫人みこふじんに与うべき慰問の手紙を作つたのであつた。――

おれはこの挿話そうわを書きながら、お君さんのサンティマンタリス

ムに微笑を禁じ得ないのは事実である。が、おれの微笑の中には、

寸毫すんごうも悪意は含まれていない。お君さんのいる二階には、造花

の百合ゆりや、「藤村詩集」や、ラファエルのマドンナの写真のほかに、自炊じすい生活に必要な、台所道具が並んでいる。その台所道具の象徴する、世智せちがら辛い東京の実生活は、何度きよう今日までにお君さんへ迫害を加えたか知れなかった。が、落莫らくぼくたる人生も、涙の靄もやとほを透して見る時は、美しい世界を展開する。お君さんはその実生活の迫害を逃のがれるために、この芸術的感激の涙の中へ身を隠した。そこには一月六円の間代まだいもなければ、一升七十銭の米代もない。カルメンは電燈代の心配もなく、気楽にカスタネットを鳴らしている。浪子夫人も苦労はするが、薬代の工面くめんが出来ない次第ではない。一言にして云えばこの涙は、人間苦の黄昏たそがれのおぼろめく中に、人間愛の燈火をつつましやかにともしてくれる。ああ、

東京の町の音も全くどこかへ消えてしまふ真夜中、涙に濡れた眼を挙げながら、うす暗い十燭の電燈の下に、たった一人逗子の海風いふうとコルドヴァの杏竹桃きようちくとうとを夢みている、お君さんの姿を想像——畜生、悪意がない所か、うっかりしているとおれまでもサンティマンタルになり兼ねないぞ。元来世間の批評家には情味がないと言われている、すこぶる理智的なおれなのだが。

そのお君さんがある冬の夜、遅くなってカツフェから帰つて来ると、始はじめは例のごとく机に向つて、「松井須磨子まついすまこの一生」か何か読んでいたが、まだ一頁ページと行かない内に、どう云う訳かその書物にたちまち愛想をつかしたごとく、邪慳じゃけんに畳の上へ抛ほうり出してしまった。と思うと今度は横坐よこざわりに坐つたまま、机の上に頬ほおづ

杖^えをついて、壁の上のウイル——ベエトオフエンの肖像を冷淡

にぼんやり眺め出した。これは勿論唯事ではない。お君さんはあのカツフェを解^{かい}傭^{よう}される事になったのであろうか。さもなくればお松さんのいじめ方が一層悪^{あく}辣^{らつ}になったのであろうか。あるいはまたさもなくば齟^む齬^しでも痛み出して来たのであろうか。いや、お君さんの心を支配しているのは、そう云う俗臭を帯びた事件ではない。お君さんは浪子夫人のごとく、あるいはまた松井須磨子のごとく、恋愛に苦しんでいるのである。ではお君さんは誰に心を寄せているかと云うと——幸^{さい}お君^いさんは壁の上のベエトオフエンを眺めたまま、しばらくは身動きもしそうはないから、その間におれは太急ぎで、ちよいとこの光榮ある恋愛の相手を紹介

しよう。

お君さんの相手は田中君たなかと云つて、無名の——まあ芸術家である。何故なぜかと云うと田中君は、詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油絵の具も使う、役者も勤める、歌骨牌うたがるたも巧いうま、薩摩琵琶さつまびわも出来るひと云う才人だから、どれが本職でどれが道楽だか、鑑定の出来るものは一人もない。従つてまた人物も、顔は役者のごとくのつperiつりperiして、髪は油絵の具のごとくてらてららして、声はヴァイオリンのごとく優しくつて、言葉は詩のごとく気が利きいて、女を口説くどく事は歌骨牌をとるごとく敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたうごとく勇壮活潑を極めてゐる。それが黒い鍰つばびろ広の帽子をかぶつて、安物やすものらしい狢服りようふくを着用して、

ぶどういろ
葡萄色のボヘミアン・ネクタイを結んで——と云えば大抵わ

かりそうなものだ。思うにこの田中君のごときはすでに一種のタ

イプなのだから、神田本郷辺のバアやカツフエ、青年会館や音

楽学校の音楽会（但し一番の安い切符の席に限るが）兜屋や三

会堂の展覧会などへ行くと、必ず二三人はこの連中が、傲然

と俗衆を睥睨している。だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲

しければ、そう云う場所へ行つて見るが好い。おれが書くのはも

う真平御免だ。第一おれが田中君の紹介の労を執っている間に、

お君さんはいつか立上つて、障子を開けた窓の外寒い月夜を眺

めているのだから。

かわらやね
瓦屋根の上の月の光は、頸の細い硝子の花立てにさした造花

の百合^{ゆり}を照らしている。壁に貼ったラファエルの小さなマドンナを照らしている。そうしてまたお君さんの上を向いた鼻を照らしている。が、お君さんの涼しい眼には、月の光も映っていない。霜の下りたらしい瓦屋根も、存在しないのと同じ事である。田中君は今夜カツフェから、お君さんをここまで送つて来た。そうして明日^{あす}の晩は二人で、楽しく暮そうと云う約束までした。明日はちようど一月に一度あるお君さんの休^{やすみ}日だから、午後六時に小^お川^{かわ}町の電車停留場で落合つて、それから芝^{しば}浦^{うら}にかかっている伊太利人^{イタリイじん}のサアカスを見に行こうと云うのである。お君さんは今^き日^{よう}までに、未^{いまだ}嘗^{かつて}男と二人で遊びに出かけた覚えなどはない。だから明日の晩田中君と、世間の恋人同士のように、つれ立って

夜の曲馬きよくばを見に行く事を考えると、今更のように心臓こじょうの鼓動が
高くなつて来る。お君さんにとって田中君は、宝窟ほうくつの扉を開く
べき秘密の呪文じゅもんを心得ているアリ・ババとさらに違いはない。
その呪文が唱えられた時、いかなる未知の歓楽境がお君さんの前
に出現するか。——さつきから月を眺めて月を眺めないお君さん
が、風に煽あおられた海のごとく、あるいはまた将まさに走らんとする乗
合自動車のモオタアのごとく、轟く胸の中に描いているのは、実
にこの来るべき不可思議ふかしぎの世界の幻であつた。そこには薔薇ばらの花
の咲き乱れた路みちに、養殖真珠の指環ゆびわだの翡翠ひすいまがいの帶止めだの
が、数限りもなく散乱している。夜 鶯ナイチンゲルの優しい声も、すで
に三越みつこしの旗の上から、蜜したたらを滴すように聞え始めた。橄欖かんらんの花

の匀においの中に大理石を畳んだ宮殿では、今やミスタア・ダグラス・フェアバンクスと森もり律りつ子こ嬢じょうとの舞踏が、いよいよ佳境に入ろうとしているらしい。……

が、おれはお君さんの名誉のためにつけ加える。その時お君さんの描いた幻の中には、時々暗い雲の影が、一切いっさいの幸福おびやかを脅すように、底気味悪く去来していた。成程お君さんは田中君を恋しているのに違いない。しかしその田中君は、実はお君さんの芸術的感激が円光いただを頂かせた田中君である。詩も作る、ヴァイオリンも弾ひく、油絵の具も使う、役者も勤める、歌骨牌うたがらも巧うまい、薩摩琵琶も出来るサア・ランスロットである。だからお君さんの中にある処しよじよ女にょの新鮮な直観性は、どうかするとこのランスロットの

すこぶる怪しげな正体を感じずる事がないでもない。暗い不安の雲の影は、こう云う時にお君さんの幻の中を通りすぎる。が、遺憾ながらその雲の影は、現れるが早いかわ消えてしまう。お君さんはいくら大人おとなじみていても、十六とか十七とか云う少女である。しかも芸術的感激に充ち満ちている少女である。着物を雨で濡らす心配があるか、ライン河の入日の画端書えはがきに感嘆の声を洩もらす時のほかは、滅多めったに雲の影などへ心を止めないのも不思議ではない。いわんや今は薔薇ばらの花の咲き乱れている路に、養殖真珠の指環だの翡翠まがいの帯止めだのが――以下は前に書いた通りだから、そこを讀み返して頂きたい。

お君さんは長い間、シャヴァンヌの聖・ジュヌヴィエヴのごと

く、月の光に照らされた瓦屋根を眺めて立っていたが、やがて噓くさめを一つすると、窓の障子をぱたりとしめて、また元の机きわの際へ横坐りに坐ってしまった。それから翌日の午後六時までお君さんが何をしていたか、その間の詳しい消しょうそく息は、残念ながらおれも知っていない。何故なぜ作者たるおれが知っていないのかと云うと——正直に云ってしまえ。おれは今夜中にこの小説を書き上げなければならぬからである。

翌日の午後六時、お君さんは怪しげな紫紺しこんの御召おめしのコオトの上にクリム色の肩掛をして、いつもよりはそわそわと、もう夕暗に包まれた小川町の電車停留場へ行った。行くとすでに田中君は、例のごとく鰐つばひろ広の黒い帽子を目深くまぶかかぶって、洋銀の握りのつ

いた細い杖をかいこみながら、縞の荒い半オオヴァの襟を立てて、赤い電燈のともった下に、ちゃんと佇たたずんで待っている。色の白い顔がいつもより一層また磨きがかかって、かすかに香水の匀においまでさせている容子ようすでは、今夜は格別身じまいに注意を払っているらしい。

「御待たせして？」

お君さんは田中君の顔を見上げると、息のはずんでいるような声を出した。

「なあに。」

田中君は大概おおような返事をしながら、何とも判然しない微笑を含んだ眼で、じっとお君さんの顔を眺めた。それから急に身ぶるい

を一つして、

「歩こう、少し。」

とつけ加えた。いや、つけ加えたばかりではない。田中君はもうその時には、アアク燈に照らされた人通りの多い往来を、須田すだちよ町うの方へ向つて歩き出した。サアカスがあるのは芝浦しばうらである。歩くにしてもここからは、神田橋かんだばしの方へ向つて行かなければならない。お君さんはまだ立止つたまま、埃ほこり風かぜにひるがえ翻るクリーム色の肩掛へ手をやって、

「そつち？」

と不思議そうに声をかけた。が、田中君は肩越しに、

「ああ。」

と軽く答えたぎり、依然として須田町の方へ歩いて行く。そこで
お君さんもほかに仕方がないから、すぐに田中君へ追いつくと、
葉を振った柳の並樹の下を一しよにいそいそと歩き出した。する
とまた田中君は、あの何とも判然しない微笑を眼の中に漂わせて、
お君さんの横顔を窺いながら、

「お君さんには御気の毒だけれどもね、芝浦のサアカスは、もう
昨夜で^{ゆうべ}おしまいなんだそうだ。だから今夜は僕の知っている家へ^{うち}
行つて、一しよに御飯でも食べようじゃないか。」

「そう、^{わたし}私どつちでも好いわ。」

お君さんは田中君の手が、そつと自分の手を捕えたのを感じな
がら、希望と恐怖とにふるえている、かすかな声でこう云つた。

と同時にまたお君さんの眼にはまるで「不如歸」ほととぎすを読んだ時のような、感動の涙が浮んできた。この感動の涙を透とおして見た、小川町、淡路町あわじちよう、須田町の往来が、いかに美しかったかは問うを待たない。歳暮大売出しの楽隊の音、目まぐるしい仁丹じんたんの広告、電燈、クリスマスを祝う杉の葉の飾かざり、蜘蛛手くもでに張った万国国旗、飾窓かざりまどの中のサンタ・クロス、露店に並んだ絵葉書や日曆ひごよみ——
 すべてのお君さんの眼には、壮大な恋愛の歓喜をうたいながら、世界のはてまでも燦びやかに続いているかと思われる。今夜に限って天上の星の光も冷たくない。時々吹きつける埃ほこり風ぜも、コオトの裾を巻くかと思うと、たちまち春が返ったような暖い空気になってしまう。幸福、幸福、幸福……

その内にふとお君さんが気がつくと、二人はいつか横町よちようを

曲つたと見えて、路幅の狭い町を歩いている。そうしてその町の

右側に、一軒の小さな八百屋やおやがあつて、明く瓦斯あかるガスの燃えた下に、

大根だいこん、人参にんじん、漬け菜つけな、葱ねぎ、小蕪こかぶ、慈姑くわい、牛蒡ごぼう、八つ頭やがしら、小松菜こまつな、

独活うど、蓮根れんこん、里芋りんご、林檎りんご、蜜柑うづたかの類が堆く店に積み上げてある。

その八百屋の前を通つた時、お君さんの視線は何かの拍子ひょうしに、

葱の山の中に立っている、竹に燭奴つけぎを挟んだ札ふだの上へ落した。札

には墨黒々と下手な字で、「一束四銭ひとたばよんせん」と書いてある。あ

らゆる物価が暴騰した今日こんにち、一束四銭と云う葱は滅多にない。こ

の至廉しれんな札を眺めると共に、今まで恋愛と芸術とに酔つていた、

お君さんの幸福な心の中には、そこに潜んでいた実生活が、突如

としてその惰眠から覚めた。間髪かんはつを入れずとは正にこの謂いである。薔薇ばらと指環と夜ナイト鶯チンゲエルと三越みつこしの旗とは、刹那に眼底を払
 って消えてしまった。その代り間代まだい、米代、電燈代、炭代、肴さかな
 代だい、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃——そのほかありとあらゆる生活費が、過去の苦しい経験と一しよに、恰あたも火取虫の火に
 集るごとく、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群むらつて来
 る。お君さんは思わずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆あ
 気つけにとられている田中君を一人後に残して、鮮あざな瓦斯かガスの光を浴び
 た青物の中へ足を入れた。しかもついにはその華奢きゃしゃな指を伸べ
 て、一束四銭の札が立っている葱の山を指さすと、「さすらい」
 の歌でもうたうような声で、

「あれを二束ふたたば下さいな。」と云つた。

埃風ほこりかぜの吹く往来には、黒い鍰つばびろ広の帽子ぼうしをかぶつて、縞しまの

荒い半才オヴァの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある細い杖

をかいこみながら、孤影しょうげん悄然しやうぜんとして立っている。田中君の想

像には、さつきからこの町のはずれにある、格子戸造こうしどづくりの家が浮

んでいた。軒まつに松の家やと云う電燈の出た、沓脱くつぬぎの石が濡れてい

る、安普やすぶしん請らしい二階家である、が、こうした往来に立ってい

ると、その小ぢんまりした二階家の影が、妙にだんだん薄くなつ

てしまう。そうしてその後あとには徐おもむろに一束四錢の札ふだを打った葱ねぎの山

が浮んで来る。と思うとたちまち想像が破れて、一陣の埃風ほこりかぜ

が過ぎると共に、実生活のごとく辛辣しんらつな、眼に滲しむごとき葱の

匂が實際田中君の鼻を打った。におい

「御待ち遠さま。」

憐むべき田中君は、世にも情無なさけない眼つきをして、まるで別人でも見るように、じろじろお君さんの顔を眺めた。髪を綺麗にまん中から割つて、忘れな草の簪かんざしをさした、鼻の少し上を向いているお君さんは、クリイム色の肩掛をちよいと顫あごでおさえたまま、片手に二束八銭の葱を下げて立っている。あの涼しい眼の中に嬉しそうな微笑を躍らせながら。

とうとうどうにか書き上げたぞ。もう夜が明けるのも間はあるまい。外では寒そうなにわとり鶏の声がしているが、折角せつかくこれを書き上げて、いやに気のふさぐのはどうしたものだ。お君さんはその晩何事もなく、またあのおんなかみゆい女髪結の二階へ歸つて来たが、カツフエの女給仕をやめない限り、その後ごも田中君と二人で遊びに出る事がないとは云えまい。その時の事を考えると、——いや、その時はまたその時の事だ。おれが今いくら心配した所で、どうにもなる訳のものではない。まあこのままでペンをお擱こう。左様さようなら。お君さん。では今夜もあの晩のように、ここからいそいそ出て行つて、勇ましく——批評家に退治たいじされて来給え。

（大正八年十二月十一日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葱

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>